

中学生の学校生活への充実感に 関する教育心理学的研究 (2)*

——学校生活への意識・満足度の再調査による変化を中心に——

一 谷 彊・相 田 貞 夫・水 谷 昭

Educational and Psychological Study of Sense of Self-fulfillment
to School Life among Junior High School Students (2)

——With Special Reference to the Change of Test-Retest
of Self-satisfaction to School Life Situations——

Tsuyoshi ICHITANI, Sadao AIDA, and Akira MIZUTANI

Received November 2, 1989

抄 録： 学校生活に対して持つ中学生の充実感を検討した。本報告では学年当初での学校生活への充足感・満足感を問うたのち、学校が意図をもって計画した特別活動等がどのように理解されているかも質問紙的に調査したが、学年途中（第2学期終末）の再調査ではどのようにそれが変容しているか、併せてその背景となる理由づけなども問うた。その結果、対教師関係、友人関係、学習（教科）、クラブ活動その他の特別活動について指導者としての教師の役割について示唆をもたらした。さらに、これら因子分析的に検討した結果、学年毎に充足感の様相が異なること、それに関与する背景も異なることが因子的に示され、学年に応じ、「個」とそこに形成される「全体（集団）」に対してどのように指導的視点を導入するかを示唆を与えた。

索引語： 中学生、学校生活、生徒指導、因子分析、質問紙法

* 本研究は、昭和62年度京都府教育委員会現職教育職員長期研修派遣事業の一環として派遣された舞鶴市立白糸中学校教諭水谷 昭の研究報告「集団活動と生徒理解について——集団不適応生徒の指導にかかわって——」を相田と一谷とが指導・助言してまとめたもののうち、「Ⅱ. 生徒の学校生活に対する意識と行動（研究1）」から、「調査1」（7月）「調査2」（12月）の比較検討の部分について、加筆・修正を行ない、再検討を加え、現在の学校教育の実践に示唆をもたらす、還元されることを願って報告したものである。なお、調査協力校である、当時の水谷教諭の勤務校舞鶴市立和田中学校の先生方や生徒のみなさんの理解あるご協力に対し深甚の謝意を表する次第である。

Abstract: In the previous study, the authors investigated the relationship between the sense of self-fulfillment and the behavior (or activity) of school life situations among junior high school students. The subjects used were about 450 students of a public school in Maizuru, Kyoto Prefecture. For the teachers these results obtained from these data were very suggestive and instructive for the future guidance of the present junior high school students. In the present study, the authors investigated the data obtained by the retest method using the same questionnaire items of the previous study. In addition to it, in the present study, the authors questioned to the same students of the previous study the reasons of the sense of self-fulfillment to school life. Further these data were factorially analyzed and were compared to the data of the previous study. On the basis of these procedures, the psychological changes from the previous to the present results were discussed from the several points. Generally speaking, the results obtained were very useful of understanding the sense of self-fulfillment, the reasons of unsatisfactory (or satisfactory) feeling to school life, and the methods of guidance to individual student or every kind of student groups.

Key Words: Junior high school students, Guidance, School life, Questionnaire, Factor analysis

I. 導入——問題と目的——

先の報告「中学生の学校生活への充実感に関する教育心理学的研究（１）」（一谷・相田・水谷, 1989）では、現代の中学生の持つ①「学校に対する満足度」を中心に、②「学校で教育的意図をもって行われる集団活動についての意識」のうち、主として a. 「生徒たちのもつ仲間意識」、b. 「生徒会・行事的活動に対して持つ意識」、c. 「調査協力校がとりわけ教育的に重視してきたいわゆる『W 中ギネス』（詳細は別添資料 1 参照。）へのとりくみに対して持つ意識」などを質問紙法で調査した結果を報告してきた。

その結果、指導者としての教師は、個々の生徒を重視していくべきか、それとも集団としての生徒を重視していくべきか、そのバランスをどのように考えてアプローチすべきかについて示唆的な諸側面がうかがえた。中学校期は、一般的には思春期といわれるが、その思春期体験のなかでも、学年に応じて、学校生活への満足度や集団的活動への意識にも微妙な発達の変化がみられ、指導者としての教師がどんな形で役割を果たすかを再吟味する有益な資料となった。具体的には、1 年生あたりでは、学童期の延長としての心理的、身体的状態が関係しているのか、それとも学童期の学校体験の延長としての環境的側面が関係しているのかは明確でないにせよ、教師との直接的関係のあり方がいかに大きく、それによって学校への充実感・満足感が影響するかにみえた。しかし、2 年生あたりからは、友達関係への関心が高まり、“生徒たち”という集団に対して教師がいわば間接的な形でどう関与し、危機的介入（Crisis intervention）をするかが重要であるようにうかがえた。3 年生ぐらいになると、将来への進路などについても考えねばならぬ時期に入り、1 年生の時期のように児童期の延長としての他者依存的（inter-dependent）な状態のゆえに教師のあり方にいかに支配されて学校への満足感が変動することからは脱却して、より

内面化され深化された形で自己をみつめつつ、指導者としての教師を暗に希求しているかにみえる行動がうかがえ、その意味での教師の接し方によって学校への充実感にも影響をもたらすと考えられる結果となった。

このように、学校教育のなかで重要な役割を果たす教師のあり方は、中学校期といっても、学年によってどのように生徒たちに接し対処していくかや、「個」への援助・指導と「全体」への援助・指導のバランスをどのように配慮していくかによって、学校生活への意識や行動あるいは充実感や満足感に敏感に反映することがうかがえた。

そこで、学校生活に充実感がもてる生徒指導や集団活動を考えるとき、現時点で生徒が学校生活そのものをどのように受けとめているかを単発的に調査しただけでは十分ではないだろう。ということは、一般的にいて中学校などにおいても、それぞれの学校にかなり長期的な教育目標があり、それに応じて各年度の教育目標を設定して、その達成と充実而努力しているのが現状である。「指導」というものは、「目標」が具体的に展開される実際的な形のもののだが、この「指導」の成果は「評価」としてあらわれてくる。ここに「評価」は教師が生徒を評価するというよりも、評価を介して、どの生徒がどんなところで、何に、どんな理由でつまづいているのかを教師が理解すべきものと考えの方が妥当である。つまり、「評価」は、生徒からの、教師の「指導」への反省のサインを送ってくれたものとして、不十分な点、改善すべき点を反省する手がかりを与えてくれていると考えるべきだと考える。そこに単発的な調査のみでは十分でないことが理解できる。まず、「指導」に先立っての診断的評価としての調査を行ない、その実体に即して「指導」があり、その後に「指導」の成果を問うための総括的評価なり、指導途中での形成的評価があってはじめて調査が意味をもつ。もちろん、そうしたフィードバックのなかで将来的には生徒一人ひとりが自己評価し、自己教育できる方向性をもつべきことはいうまでもない。

我々の報告した先の「中学生の学校生活への充実感に関する教育心理学的研究（1）」（以下「研究（1）」という。）は、協力校で、ある特定年度の7月に実施した調査の結果を主として吟味・検討したものであった。（具体的内容は別添資料2を参照。）協力校で、これまで比較的効果的と思われる集団的活動を継続的に実践するに際して、たしかに生徒一人ひとりにとって意味あるものとして受けとめられているかを知るのに、とりわけ小学校からあがってきた1年生にとっては、ある程度中学校での生活を体験してみたいうでないと、調査内容に理解不十分や回答不可能な項目があったため、第1学期終業前の7月に調査した。その調査結果を報告したものであったが、これに基づいて「指導」を展開した結果を、今回の報告では12月時点（第2学期終業前）に、特定項目のみについて調査し、どのように変容しているかをみたものを中心に報告しようと考えている。いわば、事前調査（診断的評価のための）に基づいて「指導」を展開して、事後調査（ないし途中調査）を行ったわけで、総括的評価とまではいかないにせよ、形成的評価とみてよからう。（この12月時点での調査内容は、「調査2」として別添資料3に掲載。）

このようにして、生徒一人ひとりからの学校生活への充実感や意識を基にして、これまでの実践や今後の改善点、反省点を模索し、それを再び生徒たちに還元して指導・助言・援助するための過程であると理解したい。その背景には、教育理念的前提として、「生徒たちからの意識や充実感に関する回答は、指導者としての教師への反省点に対する反応であり、サインであり、それに基づく教師の努力なしには生徒がより高まろうと努力することはありえない」という配慮がある。

こうした経過を基に、本研究報告の目的は具体的に次のようになる。すなわち、「調査1」（7

月時点：第1学期終了時）と「調査2」（12月時点：第2学期終了時）との比較検討を行い、その背景（理由）を調査、同時に因子的検討などを行ない、各学年の生徒を全体として、また、一人ひとりについて、どう指導・助言・援助していくべきか、『楽しい学校』という充実感を持てる方策を検討・吟味するための基礎的示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ. 研究Ⅰ：「調査1」（7月）と「調査2」（12月）の比較検討

目的：すでに「導入——問題と目的——」（前項）で言及したとおりである。

方法：先の「中学生の学校生活への充実感に関する教育心理学的研究（1）」の報告と同様調査法（質問紙法）による。なお「調査1」（7月時点）と「調査2」（12月時点）との調査項目の具体的内容は別添資料2と資料3との通りである。なお被験者についても「研究（1）」と同様。

結果と考察：

1. 学校生活への意識の変化について：

学校生活についての「調査1」を昭和62年7月15日（第1学期終了直前）に実施したのち、5ヵ月後の12月9日（第2学期終了直前）に「調査2」を実施。「調査2」の目的はすでに述べたことに加えて、新年度発足の比較的早い時点での「調査1」と、年度の後半を迎えた12月時点とで、生徒の学校生活への意識にどのような変化がみられるかを理解することで、それを再び生徒に還元するのにどう考え工夫したらよいかを検討するためである。

さらに、「調査2」では、「調査1」の質問から、①学校生活に対する満足度に関するもの8項目と、②集団的活動についての意識に関するもの2項目をとり出して質問した。加えて、各質問項目での解答に対する理由を選択肢の中から抽出して解答するという内容を付加した。（「調査2」の質問項目は別添資料3に示すとおりである。）

表1-1の左欄は、「調査1」と「調査2」との全校生徒の学校生活への肯定的傾向の回答を示している。この表から次のことがうかがえる。すなわち、2項目（「よいクラブである」、「生徒会の活動によって学校は高まる」）を除いて、7月と12月の2回の調査時点で、生徒の学校生活への意識は全体的にはあまり変化をしていない。このように全校生徒を全体としてみたとき、意識の変化は少ないが、問6・12（表中にもこの表記があるが前の数字は「調査1」での質問項目番号、後の数字は「調査2」での質問項目番号で、質問番号は異なるが質問内容は同じ。以下同様。）の「よいクラブである」（ $\chi^2 = 14.99$, $P < .01$ ）と、問20・17の「生徒会の活動によって学校は高まる」（ $\chi^2 = 2.79$, $P < 0.1$ ）で、7月時点（「調査1」）より12月時点（「調査2」）で肯定的傾向を示す回答が有意に減少していることがうかがえる。

全校生徒のうち男子生徒ではどうなっているかをみると、表1-1の中欄のとおりである。表1-1の右欄は女子生徒の結果を示している。男子（表1-1）では「よいクラブある」（問6・12）（ $\chi^2 = 9.23$, $P < .01$ ）で有意に肯定的回答が減少している。他の質問項目では有意差なく、男子生徒は全体としてみると変化が少ない。女子生徒全体では、「友達とうまくいっている」（問3・7）（ $\chi^2 = 3.87$, $P < .05$ ）と「よいクラブである」（問6・12）（ $\chi^2 = 5.99$, $P < .05$ ）とに有意な変化がみられた。前者（友達関係）は肯定的回答が有意に増加、友達関係の良好さを示唆している。「よいクラブ……」への反応は有意に減少している。有意差はみられなかったものの、「先生とうまくいっている」（問4・8）（ $\chi^2 = 1.65$, $.10 < P < .20$ ）では差のある傾向をもって肯

表１－１ 学校生活についての「調査１」（７月）と「調査２」（１２月）との比較（その１）

	全 校			男 子			女 子		
	調査１ (449人)	調査２ (446人)	χ^2 値	調査１ (213人)	調査２ (210人)	χ^2 値	調査１ (236人)	調査２ (236人)	χ^2 値
問１・１ 学校が楽しい	332 (74.0)	344 (77.1)	1.19	150 (70.4)	159 (75.7)	1.40	182 (77.1)	185 (78.4)	0.10
問２・４ 勉強がわかる	347 (77.3)	333 (74.7)	0.72	159 (74.6)	155 (73.8)	0.04	188 (79.7)	178 (75.4)	1.13
問３・７ 友達とうまくいっている	408 (90.8)	414 (92.8)	1.13	194 (91.0)	189 (90.0)	0.14	214 (90.7)	225 (95.3)	3.87*
問４・８ 先生とうまくいっている	340 (75.7)	352 (78.9)	1.29	162 (76.0)	162 (77.1)	0.06	178 (75.4)	190 (80.5)	1.65
問５・１０ よい学級である	287 (63.9)	279 (62.6)	0.15	133 (62.4)	128 (60.9)	0.09	154 (65.3)	151 (64.0)	0.00
問６・１２ よいクラブである	346 (77.1)	290 (65.0)	14.99**	167 (78.4)	138 (65.7)	9.23**	179 (75.8)	152 (64.4)	5.99*
問７・１４ 学内・打ち込むことがある	340 (75.7)	326 (73.1)	0.80	162 (76.0)	152 (72.4)	0.74	178 (75.4)	174 (73.8)	0.09
問９・１６ 学外・打ち込むことがある	362 (80.6)	365 (81.9)	0.21	171 (80.3)	174 (82.9)	0.46	191 (81.0)	191 (81.0)	0.00
問２０・１７ 生徒会の活動によって学校は高まる	385 (85.7)	364 (81.6)	2.79†	179 (84.0)	170 (81.0)	0.69	206 (87.3)	194 (82.2)	2.27
問２９・１８ ギネスによって学校は高まる	335 (74.6)	322 (72.2)	0.65	161 (75.6)	155 (73.8)	0.17	174 (73.8)	167 (70.7)	0.42

（註）「調査１」と「調査２」とでの肯定的傾向（「とても肯定」「やや肯定」）を示す回答を示した。

問６・１２「よいクラブである」については、クラブに所属していない生徒を除いた。

各細胞（マス目）内の数値は実数を、（ ）内は％を示す。

*は $p<.01$ ，*は $p<.05$ ，†は $p<.10$ で有意差または有意差傾向のある変化のあることを示す。（表１－２についても同様）

定的回答が増加している。

総じていえば、「調査１」（７月時点）と「調査２」（１２月時点）とのあいだにみられる変化は次のようである。すなわち、

- ①「友達とうまくいっている」（問３・７）は全体生徒では有意差はないが、男子生徒では有意差なく、女子生徒にのみ有意な肯定的変化がみられる。
- ②「先生とうまくいっている」（問４・８）は全校生徒では有意差はないが、男子生徒では有意差なく、女子生徒にのみ有意な肯定的変化の傾向（ $P<.20$ ）がみられる。
- ③「よいクラブである」（問６・１２）は全校生徒、男子生徒、女子生徒のいずれにも有意に変化がみられ、肯定的反応が減少している。
- ④「生徒会の活動によって学校は高まる」（問２０・１７）は、全校生徒で有意差傾向（ $P<.10$ ）をもって肯定的反応が減少する。男子生徒では変化に有意差なく、女子生徒で有意差傾向（ $P<.20$ ）をもって肯定的反応が減少する。
- ⑤他の質問項目では有意差は認められない。

以上のように、全体として学校生活への大きな意識的変化は認められないが、変化が認められた項目のなかでは、男子に比して女子の方がやや多く変化が認められ、思春期における女子生徒の人間関係への感受性が反映されているようだ。どの質問項目についても、ほぼ2/3以上の者が肯定的回答をしているが、そうしたなかでの意識的変化の増減に注目して生徒を理解し、援助・指導していく必要性が示唆される。

次に、学年別にみた結果は表1-2のようになっている。(左欄、中欄、右欄の順にそれぞれ1, 2, 3年目の結果を示す。) 1年生では、3つの質問項目に有意な、あるいは有意な傾向の変化が認められる。いずれも肯定的傾向を示す回答が「調査1」(7月)から「調査2」(12月)へと減少していく方にある。「よいクラブである」(問6・12)(90.5%→72.7%)が最も大きな変化を示し、ついで「学校内に打ち込むことがある」(問7・14)(82.3%→73.1%), 「生徒会の活動によって学校は高まる」(問7・14)(93.9%→88.3%)となっている。1年生の場合、「調査1」から「調査2」の時点へと有意な変化がみられたとはいえ、各質問項目への肯定的回答はもとも2年生・3年生よりも高水準で、ある意味では2・3年生の水準に近づいたともいえる面がある。中学校に入学してまだ比較的時間もない時期(「調査1」は入学後3か月である。)で、多少の緊張感と期待感を抱きつつ、「さすが中学校」といったふうに、小学校生活との違いに目を見張っている7月時点での「クラブ活動」や「生徒会活動」への高い評価が、第2学期を経過す

表1-2 学校生活についての「調査1」(7月)と「調査2」(12月)との比較(その2)

	1 年 生			2 年 生			3 年 生		
	調査1 (147人)	調査2 (145人)	χ^2 値	調査1 (148人)	調査2 (144人)	χ^2 値	調査1 (154人)	調査2 (157人)	χ^2 値
問1・1 学校が楽しい	124 (84.4)	122 (84.1)	0.06	108 (73.0)	106 (73.6)	0.03	100 (64.9)	116 (73.9)	3.07 [†]
問2・4 勉強がわかる	129 (87.8)	121 (83.5)	1.02	110 (74.4)	113 (78.5)	0.67	108 (70.1)	99 (63.1)	1.68
問3・7 友達とうまくいっている	139 (94.5)	135 (93.1)	0.02	134 (90.6)	137 (95.1)	2.25	135 (87.7)	142 (90.4)	0.56
問4・8 先生とうまくいっている	109 (74.2)	114 (78.6)	0.76	114 (77.0)	111 (77.1)	0.03	117 (76.0)	127 (80.9)	1.06
問5・10 よい学級である	68 (46.3)	75 (51.7)	0.79	99 (66.9)	90 (62.5)	0.58	120 (78.0)	114 (72.6)	1.12
問6・12 よいクラブである	133 (90.5)	104 (71.7)	16.48**	109 (73.6)	90 (62.5)	2.91 [†]	104 (67.5)	96 (61.1)	1.75
問7・14 学内・打ち込むことがある	121 (82.3)	106 (73.1)	3.50 [†]	98 (66.2)	105 (72.9)	1.46	121 (78.6)	115 (73.3)	1.15
問9・16 学外・打ち込むことがある	123 (83.7)	123 (84.8)	0.00	117 (79.1)	115 (79.8)	0.03	122 (79.2)	127 (80.9)	0.06
問20・17 生徒会の活動によって学校は高まる	138 (93.9)	128 (88.3)	2.74 [†]	120 (81.0)	115 (79.8)	0.03	127 (82.5)	121 (77.1)	1.37
問29・18 ギネスによって学校は高まる	118 (80.3)	119 (82.0)	0.09	107 (72.3)	101 (70.1)	0.12	110 (71.5)	102 (65.0)	1.43

るにつれて、1年生もそれなりの形で中学校生活に参加して築きあげていく立場への自覚と依存との心的拮抗のなかで、12月時点の「調査2」ではこれらの項目への反応が肯定的ではあれ、7月と比較して否定的にならざるを得ない面を示したのではないか。そのことは「学校内に打ち込むことがある」(問7・14)(82.3%→73.1%)と10%水準で有意差傾向をもった回答にも示唆されている。一般的なことばを用いれば、第1学期終了時の未だどちらかといえば観衆者の傍観者の評価から、第2学期終了時での参加者としての評価反応への変化ともいえるかもしれない。

2年生では「友達とうまくいっている」(問3・7)(90.6%→95.1%, $P < .20$)が有意な傾向をもって増加的变化を、「よいクラブである」(問6・12)(73.6%→62.5%, $P < .10$)が有意な傾向をもって減少的变化を示している。その他の項目では有意な変化は認められない。一般的には、前期中等教育(中学校期の教育)で、指導者の教育的意図が入りにくい、いわゆる指導困難期は2年生であるといわれている。「よいクラブである」との意識は低下するのに、「友達とうまくいっている」という反応は90%台とはいえ増加する傾向があるのは、いわゆる「気の合う友達」というものと「クラブなどでの友達関係」とに分化が生じているためではないか。そこに指導面でも難しさがあると考えられる。青年期は一般に、秘密をもつことに心理的意味があり、指導面や教育面からみた善悪を超えて、自分たちの悩みや喜びは自分達のレベルのものにしか理解されないという心理的離乳の特色を2年生あたりが顕著に反映しているものとも考えられる。

3年生では、「学校が楽しい」(問1・1)(64.9%→73.9%, $P < .10$)が多少増加傾向、「勉強がわかる」(問2・4)(70.1%→63.1%, $P < .20$)が減少傾向、「よいクラブである」(問6・12)(67.5%→61.1%, $P < .20$)が減少傾向の変化を示し、他の項目では変化が認められないといった結果となっている。注目に値するのは、僅かではあるが「学校が楽しい」と回答する肯定的傾向が増加していることである。他の学年にもみられない傾向で、これについて考えてみる。これには、現在のところ、教育実践的な面からと心理的な面からとの両側面からみて次のような解釈仮説が成り立ちうる。すなわち、

- ① 7月にくらべて12月は、3年生にとって進路選択の最終決定をせまられる心理的危機であるという前提に立つと、この時期に「学校が楽しい」とする傾向が以前より増加することは、生徒たちの現状認識が十分でない結果だとする立場がある。この立場からすると、生徒たちの「進路」に対する考え方や態度の甘さ、3年生としての重要な問題に対する逃避的な考え方などを危惧する考え方へとつながっていく。
- ② 社会的な現実をみると、中学校時代が最も楽しく過ごすことのできる時代だと考え、7月から12月へと卒業が近づいてくゆなかで、一人ひとりの生徒が生活をエンジョイしようとしている結果であるとする立場がある。この立場に立脚すると、義務教育の最終仕上げの時期を楽しく豊かに過ごそうという面と、「今しか好きなことのできる時期はない」という、歯どめのない快楽への暴走という面との両面があるという解釈ができる。この立場の考えでは①と同様に、「進路」への意識は相対的に後退する。
- ③ 時宜を超えた学年・学級を中心とする集団的活動の高まりが進行している結果であるとする立場である。この立場に立つと、その背景に生徒一人ひとりに生活・学力の両面に着実な力量、安定したしかも適確な思考や判断力を身につけた上での高まりであるか否かが問われる。もちろん、教師からみてたしかに安心できる状態の「学校が楽しい」という側面も否定できない。そうした認識や意識が集団的活動を通して培われてきていることも否定できないことである。にもかかわらず、この意識の内実により深く迫らねばならないことも、学校教育では避けて通れ

ないことである。これらについてはさらに検討を要する。

「勉強がわかる」や「よいクラブである」において肯定的回答が減少の傾向を示しているのも上記のことと関連づけると理解しやすいと考えられる。

2. 学校生活についての意識の背景(理由づけ)——「調査2」を中心に——について:

今まで「調査1」(7月時点)と「調査2」(12月時点)とのあいだの学校生活への意識の変化をみて比較検討した結果、全体的には、どちらかといえばあまり大きな意識的変動は見受けられなかった。これはいわば量的変化であって質的变化ではない。変動するにせよしないにせよ、内容的、質的な側面がどのようになっているかが、生徒一人ひとりを理解し、指導・援助していくのに重要なことである。そこで「調査2」(12月時点)では各質問項目に対する回答に応じて、「なぜそう思うのか?」の理由を選択肢から抽出するという内容を加えた。(具体的内容は別添資料3を参照。)これが即座に質的、内容的な側面に対応するとは思えないが、肯定的とか否定的回答の量的変化や比較よりも、より質的な面に接近するものと考え、今後の指導・援助の示唆としたいとの意図的目的がある。

以下ではその結果の概要を報告し、吟味・考察を加えることにしたい。

図1は「学校が楽しいかどうか」で「とても楽しい」「楽しい」と回答した者の理由をたずねた結果を肯定的回答としてまとめて示したものである。図1の左側のグラフは、全体、男子、女子についてみた結果を、右側のグラフは学年別の結果を示している。(以下おおむね同様。)全体としては、「学校が楽しい」理由は、「友達がいるから」が圧倒的に多く、次いで「クラブ活動が楽しい」とつづき男女差は見られない。学年間では、2年生の理由の第1位に「クラブ活動が楽しい」があり、次いで「友達がいるから」となって、1年生や3年生と逆になっている。また、「調査2」が、3年生にとってクラブ活動を行っていない12月時点であったことから、「クラブ活動が楽しい」という理由の選択はほとんどない。

図2は「学校が楽しいかどうか」で、「全然楽しくない」「あまり楽しくない」と否定的、消極的回答をした者の理由の選択を示している。全体としては、「学校が楽しくない」ことの理由は、

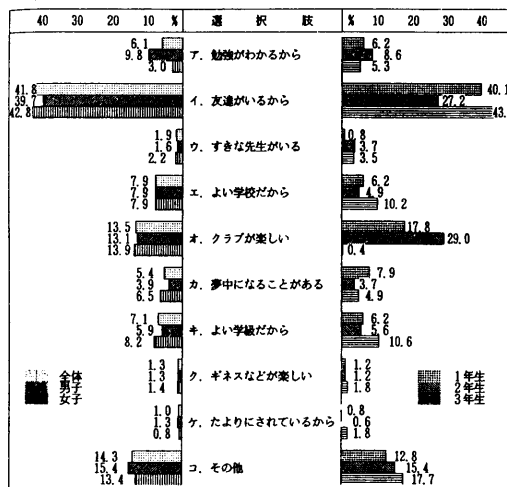


図1 「学校が楽しい」理由

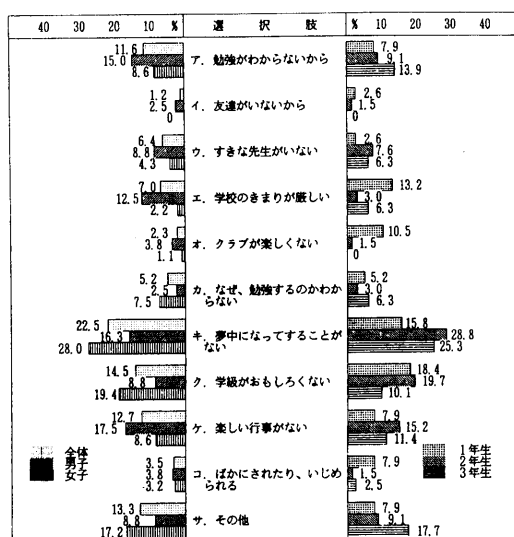


図2 「学校が楽しくない」理由

「夢中になってすることがない」が優位を占め、次いで「学級がおもしろくない」、「楽しい行事がない」などとなっている。京都府総合教育センターが昭和56年度に府下の公立中学校13校、2年生2411人を抽出して実施した「子どもの生活意識と行動に関する研究調査」の同じ質問への回答では、第1位に「学校のきまりが厳しい」（22.6%）、次いで「クラスがおもしろくない」（19.1%）となっている。この両者を比較すると、本研究の調査協力校では、「学校が楽しくない」理由が、生徒による自主的活動・行事とのかかわりによる回答になっていることに他校と異なる特徴があるように考えられる。

また、「学校が楽しくない」理由では、性差がかなり認められる。学年間では、1年生が「学校のきまりが厳しい」、「クラブ活動が楽しくない」などで、2・3年生ではみられない高い率を示している。3年生では「勉強がわからない」と回答するものも7人に1人の割合（13.9%）でいることがうかがえ、「その他」の回答率も高い。

図3は、「勉強がわかるか?」に対して「あまりわからない」、「ほとんどわからない」と否定的回答を示したものの理由づけを示している。

「勉強がわからない」とする理由として、「先生の説明がわかりにくい」と回答しながら、他方では、「自分ががんばっていない」と自らにも原因を求めている側面もうかがえる。学年間をみると、1年生では先生に原因を求めるといった特徴がある。2年生では、「もともと勉強ができないから」との回答がかなりの割合（10人に1人）になっているところが、学習意欲の面で気がかりである。3年生では「授業をしっかりと聞いていない」が他学年より少なく、「わからなければ……」、「わかりたい」といったような意欲がうかがえる。

全体としては、「勉強することが多くてむずかしい」、「勉強のやり方がわかっていない」、「今まで習ったことがわかっていない」に学校がどう対応して、どう答えるかを考えねばならないと思われる。教科学習での躓きや挫折感が、学校生活への充実感の大きな背景となることは彼らからの教師への大切な示唆である。

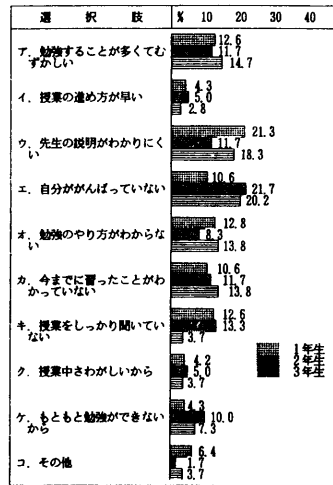


図3 「勉強がわからない」理由

図4は、「勉強があまりわからない」、「勉強がほとんどわからない」と否定的回答をした者に対して、「そんなときにはどうしているか?」をたずねた結果を示している。「友達に教えてもらう」が圧倒的に多い。次いで「そのままにしておく」とする者がかなりの率を占めており、気になる回答である。同時に、勉強がわからないとき、「先生にたずねる」がきわめて少ないことも、思春期的特徴ともいえようが、指導上考慮しなければならない課題といえる。

図5は、上述のような実態や、また、「調査1」(7月時点)での生徒たちからの回答に基づいて、「指導者としての教師像について、彼らがどんな人であることを望んでいるのか」を考えるためのものとして回答を求めた結果を示している。すなわち、「あなたにとって、先生はどのような人であってほしいと思うか?」を問うた結果で、選択肢の中から2項目を選択する形で回答を求めたものである。全体として、生徒の望む教師像は、「ひいきをしない先生」、「いっしょうけんめい教えてくれる先生」、「おもしろい先生」、「自分をよくわかってくれる先生」、「なんでも

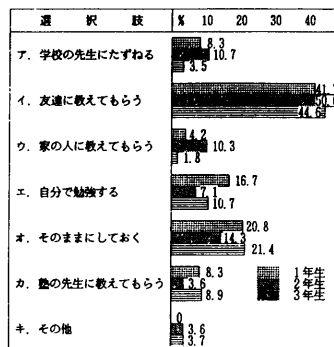


図4 勉強がわからないときどうするか

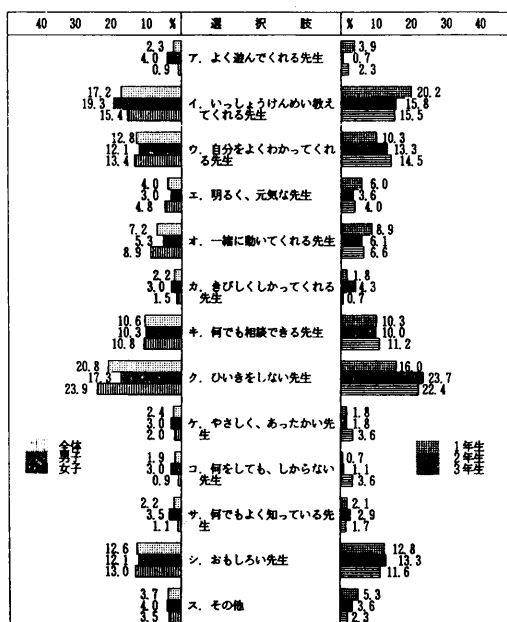


図5 生徒の望む教師像

相談できる先生」ということになる。男女間の性差的特徴をみると、男子では「いっしょうけんめい教えてくれる先生」が多く、女子では「ひいきをしない先生」が多く選択されているところに特徴がある。学年間では、あまり大きな差は認められないが、相対的には、1年生では「いっしょうけんめい教えてくれる先生」の選択が多く、2・3年生では「ひいきをしない先生」が最も多く選択されていることがうかがえる。総じて、生徒たちは公平で、いっしょうけんめいに教えてくれる、人間味のある教師像を求めているといえる。これは、これまでの種々の研究でも明らかにされていることと対応する。

図6は、「自分の学級についてどう思うか?」の質問に対して、「あまりよい学級でない」、「全然よい学級でない」と回答したものを否定的反応としてまとめて、それらの生徒に理由を選択肢のなかから2項目選択してもらった結果を示している。「よい学級でない」とする理由としては、「みんなが勝手なことをする」と回答したものがどの学年でも最も多い。次いで学年間の特徴としては、学年が進むにつれて、「まとめるための活動がない」としているものの率が多くなる傾向を示しており、調査協力校の取り組みのあり方が反映されているように思われる。さらに、3年生では、「ばかにしたり、いじめたりする人が多い」という選択はほとんどなく、ある意味では良好な傾向としての特徴がみられる。その他、「一部だけでなんでもする」、「先生とうまくいかない」などが選択されている点について、量的に少ないとはいえ、指導上考えさせられる側面がうかがえるのである。

図7は、「入部しているクラブについてどう思うか?」の回答で、「あまりよいクラブでない」、「全然よいクラブでない」と否定的、消極的的回答をしたものの理由を選択肢の中から2項目選択した結果を示している。「よいクラブでない」理由は、全体として、「クラブにこない人が多い」、

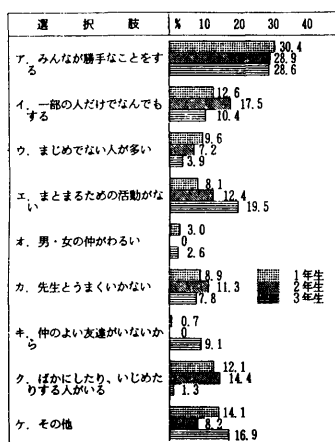


図6 「よい学級でない」理由

「一部の人で何でもする」、「勝手なことをする人がいる」、「練習内容がしっかりしていない」などが上位を占めている。男女間では、女子で「同級生のあいだにもめごとがある」などにみられるように、人間関係のトラブルに理由を求める傾向があり、男子では練習内容等に理由を求める特徴がうかがえる。学年間をみると、1年生では練習内容や活動場所など活動の条件に、3年生では顧問の先生との関係に理由を求めている割合が高いという特徴がうかがえる。

図8は、「学校生活のなかで夢中になったり、打ち込んで取り組むこと(勉強, クラブ活動, 生徒会・学級の仕事, 行事・自主活動など)があるか?」を問うたとき、「いつもある」、「ときどきある」と肯定的な反応を示したものに、「どんなことに夢中になったり、打ち込んだりしてい

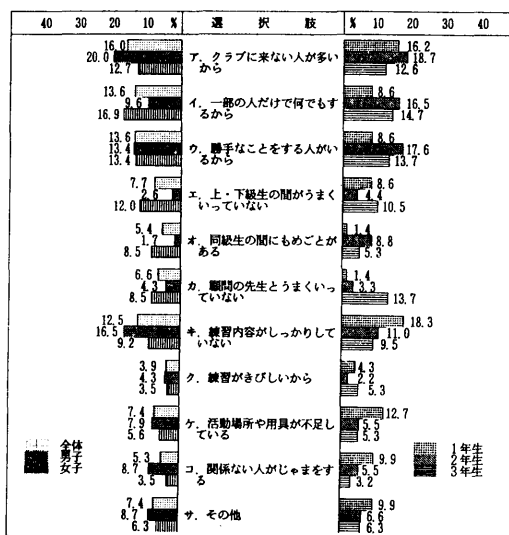


図7 「よいクラブでない」理由

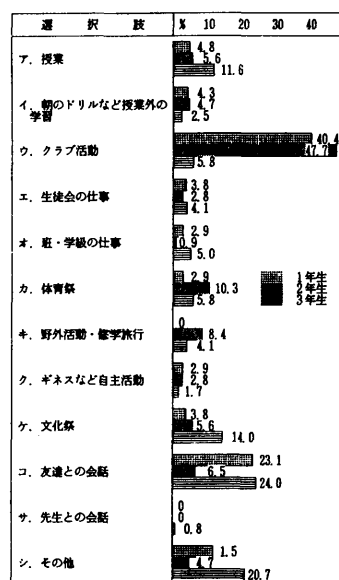


図 8 学校生活のなかで夢中になったり打ち込んでと
りくむこと

るか?」を選択肢の中から1項目を選択してもらった結果である。すでに述べたように、「調査2」は12月時点に実施したため、学年間でかなり差が認められた。(3年生ではクラブ活動は、進路や進学等の関係で、クラブ活動に参加しなくてもよいことに、調査協力校ではなっている。)1年生では「クラブ活動」、次いで「友達との会話」となっている。2年生では、「クラブ活動」が圧倒的に多く、次いで「体育祭」、「野外活動」などの行事的、特別活動的取り組みがつづく。そして他学年とは異なって「友達との会話」の選択が少ない。3年生は、実質的な活動をしていない「クラブ活動」はほとんど選択されず、「友達との会話」が優位を占め、「文化祭」、「授業」となっている。「その他」の占める割合も高いことから、夢中になったり、打ち込んでやるのが拡散する傾向がある。

以上の結果から、学校生活に対して充実感・満足感をもって精神的にも身体的にも健全な状態で主体的に行動できるように生徒一人ひとりを指導していくには、生徒が形成する種々の公的、私的集団に指導をどんな形で入れていくか、指導者である教師自身はどんな点を自己検閲すべきか、一人ひとりにはどんな形で指導を入れるかなど、過去の実践をふまえてよりよい方向を模索しつつ指導しているものの、さらに改善すべき課題がどこにあるのかに示唆をえたように思う。もちろん、ここに示された結果がすべてでないことも認識しつつ歩んでいかねばならない。そしてまた、上述の結果は、必ずしも一貫性をもたないことも事実で、そこに、思春期にある生徒たちの指導のむずかしさを思わせるものである。

Ⅲ. 研究Ⅱ： 因子分析的検討——「調査１」と「調査２」を中心に——

目的： 今まで、「調査１」（７月時点）の結果と、「調査１」（７月時点）での生徒たちの実態に基づいて「調査２」（１２月時点）を実施、両者を比較検討した結果を吟味し、同時に「調査２」では、充実感・満足感を持ちえているか否かの背景となる理由づけなどを調査した結果などについて考察してきた。それらについては上に述べてきた通りであるが、性別・学年別にみても、必ずしも一貫した結果を示しているとはいえない。そこで、ここでは、因子分析的検討を通して、生徒たちの内的状態により深くアプローチしたいと考えた。

方法： 被験者等については「研究１」（上述）と同じ。学校生活についての「調査１」と「調査２」を通して、各学年の集団的な意識や充実感・満足感の特徴を理解、把握するために、因子分析的検討を試みる。学校生活に対する調査項目のなかから、①学校生活に対する満足度に属する質問項目８項目と、②集団的活動についての意識に属する２項目の合計１０項目を選び、各質問につき４段階評定（とても肯定的、かなり肯定的、やや否定的、とても否定的）の選択肢をつくって実施、学年ごとに因子分析を試みた。なお、因子分析に際しては、NEC PC 9801 のパーソナル・コンピューターを使用、SPSS（Statistical Package for Social Science）により、主因子法で初期解を求め、Varimax 回転法で最終解を求めた。

結果と考察： 結果は表２-１-１から表２-３-２までに示すとおりである。

表２-１-１は１年生の「調査１」（７月時点）についての結果である。第Ⅰ因子は、「先生とうまくいっている」、「よい学級である」、「ギネスのとりくみによって学校はよくなる」という意識に共通して因子負荷が大きく、これに「学校が楽しい」、「勉強がわかる」という意識もかなり大きな負荷をもって共通次元を形成していることがわかる。教育心理学的示唆として考えるとき、この第Ⅰ因子からは、“先生との関係が良好であることは、学校生活でのさまざまな側面を好意的、満足的にとらえさせている”ということではなからうか。（もちろん因子分析は相関行列か

表２-１-１ 「調査１」（７月）の因子分析（１年生）

設問項目 \ (因子番号) 因子負荷	I	II	III
問１ 学校が楽しい	0.480	0.268	0.636
問２ 勉強がわかる	0.571	0.373	0.091
問３ 友達とうまくいっている	0.306	0.648	0.065
問４ 先生とうまくいっている	0.821	0.006	0.189
問５ よい学級である	0.781	-0.000	0.043
問６ よいクラブである	-0.063	0.704	0.261
問７ 学内・打ち込むことがある	0.002	0.412	0.723
問９ 学外・打ち込むことがある	0.104	0.034	0.837
問20 生徒会の活動によって学校は高まる	0.383	-0.484	0.523
問29 ギネスによって学校が高まる	0.795	0.023	0.130
寄与率	27.3	11.1	20.4
トータル寄与率 %		38.4	58.5

表 2-1-2 「調査 2」（12 月）の因子分析（1 年生）

設問項目	(因子番号) 因子負荷			
	I	II	III	IV
問 1 学校が楽しい	-0.090	0.597	0.527	-0.318
問 4 勉強がわかる	0.090	-0.071	0.440	0.276
問 7 友達とうまくいっている	-0.036	0.308	-0.143	-0.736
問 8 先生とうまくいっている	0.555	-0.341	0.391	-0.248
問10 よい学級である	-0.014	0.031	0.803	-0.170
問12 よいクラブである	0.166	0.860	-0.075	0.005
問14 学内・打ち込むことがある	0.365	0.068	0.063	-0.712
問16 学外・打ち込むことがある	0.154	-0.224	0.201	-0.771
問17 生徒会の活動によって学校は高まる	0.803	0.269	-0.142	-0.198
問18 ギネスによって学校が高まる	0.880	0.012	0.084	-0.025
寄与率	21.5	14.4	13.7	19.5
トータル寄与率 %		35.9	49.6	69.1

ら出発するので因果関係は明確化できないが。）

第Ⅱ因子は、「よいクラブである」、「友達とうまくいっている」が正の負荷をもって共通次元にあり、「生徒会の活動によって学校は高まる」は負の負荷量をもってこの因子軸に寄与している。これを教育心理学的観点から解釈すると、「クラブ活動を通して友達関係が良好になっていると考えている生徒は、生徒会活動にはマイナスの評価をもっている」（ある意味では妨害的效果、またはわずらわしい、熱中できない）ということになる。

第Ⅲ因子は、「学校内、学校外ともに打ち込めるものがある」とことと「学校が楽しい」とことが正の負荷をもって関連していることを示している。併せて、「生徒会の活動によって学校は高まる」も共通の因子次元にあることがわかる。教育的に解釈すると、「学校内、学校外に打ち込むことのある生徒は、学校も楽しいと感ずることができ関連性があり、生徒会の活動によって学校は高まると受けとめていることとも関連がある」ということである。

表 2-1-2 は同じく 1 年生の「調査 2」（12 月時点）での因子分析の結果を示している。第Ⅰ因子では、「先生とうまくいっている」（0.555）、「生徒会の活動によって学校は高まる」（0.803）、「ギネスによって学校が高まる」（0.880）がいずれも大きな正の負荷量をもって因子軸を形成している。「生徒会の活動、ギネスなどのとりくみを評価している生徒は、先生との関係も良好な生徒である」ことを示唆している。因果関係はともかくとして、調査協力校が教育目標達成のため重視してきた生徒会活動やギネスのとりくみの意義がクローズ・アップされており、同時にそれを大切に考えてきた指導者としての教師との関係も共通次元に出現しているということになる。

第Ⅱ因子は、「よいクラブであるから学校が楽しい」とする考えであることがうかがえる。

第Ⅲ因子は、「よい学級であって、勉強もわかるから学校が楽しい」とする意識であり、そこに「先生ともうまくいっている」こともかなり関与していみことがうかがえる。

第Ⅳ因子は、「友達とうまくいっていることが、学校内でも学校外でも打ち込めることがある

表 2-2-1 「調査 1」（7 月）の因子分析（2 年生）

設問項目 \ (因子番号) 因子負荷	I	II	III	IV
問 1 学校が楽しい	0.774	0.173	0.157	0.165
問 2 勉強がわかる	-0.109	0.783	-0.074	0.116
問 3 友達とうまくいっている	0.818	0.009	0.011	-0.063
問 4 先生とうまくいっている	0.430	0.531	0.249	-0.300
問 5 よい学級である	0.686	-0.076	0.284	0.233
問 6 よいクラブである	0.424	0.340	0.429	-0.265
問 7 学内・打ち込むことがある	0.128	0.743	0.106	0.111
問 9 学外・打ち込むことがある	0.170	0.174	0.109	0.893
問 20 生徒会の活動によって学校は高まる	0.133	0.152	0.831	0.085
問 29 ギネスによって学校が高まる	0.139	-0.073	0.864	0.052
寄与率 トータル寄与率 %	22.0	16.6 38.6	18.2 56.8	10.8 67.6

ことにつながる”という意識的次元である。

以上のように、1 年生について「調査 1」（7 月）と「調査 2」（12 月）との、因子分析的パターンでの意識の変化をみると、①先生に依存した意識から、友達との関係による意識へ、②学校のとりくみはあまりかわりないとの意識から、学校のとりくみとのかかわり（学校派とクラブ派といってもよいかもしれない）に深く関与した意識へと変化していく様相がうかがえる。不慣れな中学校生活を体験する初期段階の 1 年生にとって、入学当初から 1 学期間を経過する間における、指導的役割を果たす教師の役割の重要性を示唆するものである。それとともに、漸次的に、教師は学校の豊かな種々の取り組みを通して、徐々に生徒相互のかかわりを見守り、育てていくという立場に立つ必要性が示唆されている。

表 2-2-1 は 7 月時点（「調査 1」）での 2 年生の因子分析結果である。第 I 因子は“友だちとうまくいき、よい学級であるから学校が楽しい”という充実感・満足感であることがわかる。これに加えて、「先生とうまくいっている」こと、「よいクラブである」ことなども多少関与している。

第 II 因子は、“勉強がわかることで、学校内に打ち込めるものがある”というものである。第 III 因子は、“生徒会の活動とギネスのとりくみを評価している”ものといえる。また、第 IV 因子は“学校外での打ち込むことに目がむいて”，他のこととあまり関連がみられないものである。

表 2-2-2 は 12 月時点（「調査 2」）での 2 年生の因子分析結果である。第 I 因子は、“学校内・学校外ともにそれぞれ打ち込めるものがあり，したがって学校も楽しいと感じうる”ものである。第 II 因子は，“友達や先生とうまくいっているから学校が楽しい”とする満足感である。第 III 因子は“クラブ活動を中心に，生徒会活動，ギネスなどのとりくみを評価している”ものである。そして第 IV 因子は，“学級を中心に，生徒会活動やギネスなどのとりくみを評価している”ものである。

2 年生での「調査 1」（7 月）と「調査 2」（12 月）との因子分析の結果から，その意識的特

表 2-2-2 「調査 2」（12月）の因子分析（2 年生）

設問項目 (因子番号) 因子負荷	I	II	III	IV
問 1 学校が楽しい	0.469	0.575	0.016	0.335
問 4 勉強がわかる	0.425	0.330	0.416	0.166
問 7 友達とうまくいっている	0.041	0.860	-0.097	-0.041
問 8 先生とうまくいっている	0.026	0.770	0.276	0.171
問10 よい学級である	0.007	0.110	-0.147	0.865
問12 よいクラブである	-0.030	0.014	0.845	-0.118
問14 学内・打ち込むことがある	0.738	0.284	0.157	0.016
問16 学外・打ち込むことがある	0.811	-0.127	-0.023	0.107
問17 生徒会の活動によって学校は高まる	0.311	0.054	0.497	0.511
問18 ギネスによって学校が高まる	0.230	0.106	0.518	0.577
寄与率 トータル寄与率 %	17.6	19.0 36.6	15.3 51.9	15.4 67.3

徴は主として次の 2 点に要約しうる。すなわち、①「学校が楽しい」という充実感・満足感の背景の変化が認められること。つまり、7 月時点では「友人とうまくいき」、「よい学級」ということから、12 月時点では「学校内・学校外に打ち込むことがある」という方向への変化があること。②「生徒会・ギネスなどへのとりくみへの評価」の背景が二分されること。つまり端的に言ってクラブ派と学級派とにかなり明確に分かれることなどである。

さて、3 年生ではどうであろうか。表 2-3-1 と表 2-3-2 がその結果を示している。ここでは、詳細な言及は避けるが、1 年生や 2 年生の場合と同様の見方をして頂ければよい。3 年生では、彼らの意識の特徴は次のようになっているといえる。7 月時点と 12 月時点での学校生活への意識にはあまり変化がみられず、「7 月の因子 I」→「12 月の因子 I」、「7 月の因子 II」→「12 月の因子 II」、「7 月の因子 IV」→「12 月の因子 III」といった特徴がみられる。たとえば、7 月時点での、「勉強がわかり、友達や先生ともうまくいってよい学級だから学校が楽しい」（因子 I）は、「勉強がわかる」こととの関連は後退しているものの、そのまま 12 月時点の「因子 I」のパターンとあまり変化がなく、持続状態にあるといった具合である。すでに表 1-2 の右欄（3 年生）で示したように、3 年生の 7 月時点に比して、12 月時点の方が「学校が楽しい」とする回答が有意に増加しているという事実の解釈として、そこで示した解釈仮説の②「残り少ない中学校生活をエンジョイしようとしている結果ではないか」と関連があるように思われる。そして、進路の選択や決定を迎えた 12 月時点で「勉強がわかる」が後退しつつも、「学校が楽しい」が増加しているということが、残されたわずかな指導期間であれ、彼らとの関係をどうしていくか危惧されるところである。3 年生にとっては、進路の最終的選択決定の時期を控えて、学習を重視しつつも、一人ひとりとの生徒が学校生活に良好な意識、満足感、充実感のもてるとりくみが必要なことを示唆している。

今まで、1 年生から 3 年生にかけて、「調査 1」（7 月）と「調査 2」（12 月）との意識的变化を因子構造的な側面から検討してきた。これらの結果を総括的に、「学校が楽しい」という、な

表 2-3-1 「調査 1」（7 月）の因子分析（3 年生）

設問項目 \ (因子番号) 因子負荷	I	II	III	IV
問 1 学校が楽しい	0.710	0.080	0.285	0.183
問 2 勉強がわかる	0.633	0.223	-0.132	-0.254
問 3 友達とうまくいっている	0.597	0.273	0.005	0.093
問 4 先生とうまくいっている	0.523	0.421	-0.033	0.179
問 5 よい学級である	0.683	-0.180	0.044	0.295
問 6 よいクラブである	0.101	0.836	-0.086	0.176
問 7 学内・打ち込むことがある	0.173	0.675	0.328	0.126
問 9 学外・打ち込むことがある	0.042	0.066	0.934	0.008
問20 生徒会の活動によって学校は高まる	0.265	0.102	-0.073	0.726
問29 ギネスによって学校が高まる	-0.007	0.239	0.113	0.781
寄与率 トータル寄与率 %	21.1	15.7 36.8	11.1 47.9	14.1 62.0

表 2-3-2 「調査 2」（12 月）の因子分析（3 年生）

設問項目 \ (因子番号) 因子負荷	I	II	III
問 1 学校が楽しい	0.736	0.191	0.153
問 4 勉強がわかる	0.432	0.128	0.383
問 7 友達とうまくいっている	0.731	-0.026	0.284
問 8 先生とうまくいっている	0.542	0.191	0.478
問10 よい学級である	0.701	0.055	0.193
問12 よいクラブである	-0.187	0.832	0.253
問14 学内・打ち込むことがある	0.552	0.591	-0.026
問16 学外・打ち込むことがある	0.443	0.656	-0.052
問17 生徒会の活動によって学校は高まる	0.386	0.038	0.650
問18 ギネスによって学校が高まる	0.080	0.055	0.851
寄与率 トータル寄与率 %	27.4	15.7 43.1	17.9 61.0

んらかの形での満足的、充実的意識に限ってまとめてみると表 3-1 から表 3-3 にみられるようになっている。表 3-1 は 1 年生、表 3-2 は 2 年生、表 3-3 は 3 年生の因子パターンをまとめたもので、「学校が楽しい」という意識と他の諸項目との関連を、「学校が楽しい」ことに関与している因子のみについて、因子負荷量をも考慮して表示している。「学校が楽しい」こととの関与の仕方は因子負荷量の大小によって知ることができる。

これらの表から特徴的なことは、

表３－１ 「学校が楽しい」との充実感・満足感への寄与パターン（１年生）

1年生	7 月（調査１）		12 月（調査２）	
学校 が 楽 し い	因子 Ⅰ 0.480	- 勉強がわかる (0.571) - 先生とうまくいっている (0.821) - よい学級である (0.781) - ギネスで学校が高まる (0.795) [先生会の活動で学校が高まる (0.383)] [友だちとうまくいっている (0.306)]	因子 Ⅲ 0.527	- 勉強がわかる (0.440) [先生とうまくいっている (0.391)] - よい学級である (0.803)
	因子 Ⅲ 0.636	- 学校内に打ち込むことがある (0.723) - 学校外に打ち込むことがある (0.837) - 生徒会の活動で学校が高まる (0.523)	因子 Ⅳ [-0.318]	- 友だちとうまくいっている (-0.736) - 学校内に打ち込むことがある (-0.712) - 学校外に打ち込むことがある (-0.771)
			因子 Ⅱ 0.597	[友だちとうまくいっている (0.308)] [先生とうまくいっている (-0.341)] - よいクラブである (0.860)

表３－２ 「学校が楽しい」との充実感・満足感への寄与パターン（２年生）

2年生	7 月（調査１）		12 月（調査２）	
学校 が 楽 し い	因子 Ⅰ 0.774	- 友達とうまくいっている (0.818) - 先生とうまくいっている (0.430) - よい学級である (0.686) - よいクラブである (0.424)	因子 Ⅱ 0.575	[勉強がわかる (0.330)] - 友達とうまくいっている (0.860) - 先生とうまくいっている (0.770)
			因子 Ⅰ 0.469	- 勉強がわかる (0.425) - 学校内に打ち込むことがある (0.738) - 学校外に打ち込むことがある (0.811) [生徒会の活動で学校は高まる (0.311)]
			因子 Ⅳ [0.335]	- よい学級である (0.865) - 生徒会の活動で学校は高まる (0.511) - ギネスによって学校が高まる (0.577)

表３－３ 「学校が楽しい」との充実感・満足感への寄与パターン（３年生）

3年生	7 月（調査１）		12 月（調査２）	
学校 が 楽 し い	因子 Ⅰ 0.710	- 勉強がわかる (0.633) - 友達とうまくいっている (0.597) - 先生とうまくいっている (0.523) - よい学級である (0.683)	因子 Ⅰ 0.736	- 勉強がわかる (0.432) - 友達とうまくいっている (0.731) - 先生とうまくいっている (0.542) - よい学級である (0.701) - 学校内に打ち込むことがある (0.552) - 学校外に打ち込むことがある (0.443) [生徒会の活動で学校は高まる (0.386)]

- ① 1年生では7月時点で2種の因子が、12月時点で3種の因子が関与（寄与）していることがわかる。これが2年生では、7月時点で1種の因子、12月時点で3種の因子が寄与する形となっている。しかし、3年生になると、7月時点、12月時点ともにそれぞれ1種の因子しか関与していない。
- ② 「学校が楽しい」ことへの因子寄与の様相は、1、2年生では分散的、拡散的であるが3年生では集中的となる。別のことばでいえば、分化から統合へと移行していることが考えられる。
- ③ 1年生では、7月には④。「先生とうまくいき、よい学級で、ギネスで学校が高まり、勉強もわかる」（因子Ⅰ）と⑤。「学校内にも、学校外にも打ち込むことがあり、生徒会の活動で学校が高まる」（因子Ⅲ）とがそれぞれ独立に関与して「学校が楽しい」と感じているのが、

12月には、①「よい学級で、先生とうまくいって、勉強もわかる」こと(因子Ⅲ)、②「友だちとうまくいって、学校の内外に打ち込めることがある」こと(因子Ⅳ)、③「よいクラブで、友だちとうまくいっている」こと(因子Ⅱ)(ここでは先生とうまくいくことはマイナスに評価されている。)の3要因がそれぞれ独立に関与して「学校が楽しく」なっている。

④2年生では、7月時点には、「友だちとうまくいき、よい学級で、先生とうまくいって、よいクラブである」こと(因子Ⅰ)が「学校を楽しく」しているが、12月時点では、①「友だちとうまくいって、先生ともうまくいき、勉強がわかること(因子Ⅱ)、②「学校外にも学校内にも打ち込めることがあって、勉強がわかり、生徒会の活動で学校は高まる」と受けとめられること(因子Ⅰ)③「よい学級で、ギネスで学校が高まり、生活会活動で学校が高まる」と受けとめられていること(因子Ⅳ)が、それぞれ独立に関与して「学校が楽しく」なっている。

⑤3年生では、①「よい学級で、先生とうまくいき、友だちともうまくいって、勉強がわかる」こと(因子Ⅰ)が、7月時点では「学校を楽しい」ものにしており、12月時点でも、①「よい学級で友だちとうまくいき、先生ともうまくいって、勉強がわかるとともに、学校内・学校外にも打ち込めるものがあり、生徒会活動で学校が高まる」と意識されること(因子Ⅰ)が「楽しい学校だ」との満足感・充実感に関与している。

⑥上記の③④⑤をまとめてみると、1年生では、7月時点では、「学校が楽しい」との満足感・充実感をもたらす背景として、

1年 { a) よい学級・よい先生 ⇔ ギネスで学校は高まる
(7月) { b) 学校内・学校外に打ち込めることがある ⇔ 生徒会活動で学校は高まる

となっており、12月時点では、

1年 { a) よい学級・よい先生 ⇔ 勉強がわかる
(12月) { b) 友だちとうまくいっている ⇔ 学校内・学校外に打ち込めることがある
c) よいクラブ

となっていく。2年生では、7月時点で

2年 { a) よい学級・よい先生・よい友だち・よいクラブ
(7月)

であったものが、12月時点では

2年 { a) よい先生・よい友だち ⇔ 勉強がわかる
(12月) { b) 学校内・学校外に打ち込めることあり ⇔ 勉強がわかる
c) よい学級 ⇔ ギネスで学校は高まる、生徒会の活動で学校は高まる

となっていく。そして3年生では、

3年 { a) よい先生・よい友達・よい学級 ⇔ 勉強がわかる
(7月)

から、

3年 { a) よい学級・よい先生・よい友達 ⇔ 勉強がわかる、学校内・学校外に打ち
(12月) 込むことあり

となっていくことがうかがえる。(なお ⇔ は、因果関係なり、先行条件と後続条件

とが明確でないから、このように示した。）

⑦以上の結果は、「学校が楽しい」と感じられることに対して、

- a) 共通している点は、よい先生、よい学級、よい友達が、勉強にせよ、その他の活動にせよ大きな要因となっていること。
- b) 「学校が楽しい」と感じられることに対して1年の後半から2年生あたりにかけて、いわゆる「学級派」と「クラブ派」に分かれること。
- c) なんらかの形で学校内なり学校外に打ち込めることがあること。
- d) 発達の（学年的）にみて、3年生でひとつの要因（因子）となってまとまって「学校が楽しい」と感じられていることは、最終学年として統合された形でそうなっていること。
- e) 「学校が楽しい」ためには、よい先生、よい学級、よい友達、よいクラブであることは重要だが逆にいえば、「学校が楽しくない」と感じている生徒がいることも否定できないわけで、そこには、先生、学級、友達、クラブなどでの主として人間関係に非好意的なイメージをもっているという背景をもって悩んでいる生徒がいることを考えねばならない。

同時に打ち込めるものがどんな方向性のものかも考えねばならない。などのことが含蓄されていると思われる。いずれにせよ、因子分析的には、指導者としての役割の中心となっている教師が、彼らの学校生活に対して、“どこに”，“どんな形で”，“何に対して”，“誰に（個か全体か）”，“いつの時期に”指導を入れていくのかに多くの示唆を与える結果が得られたと考える。

参 考 文 献

- 土居 健郎（1981）「甘え」の構造 弘文堂
- 磯貝 芳郎（編著）（1981）教育心理学の世界 福村出版
- 一谷 彊（1986）心理検査・生徒指導・教育相談の実践的研究 文部省昭和60年度教育方法等改善プロジェクトによる共同研究報告集（代表者：村井研治）「人権問題の教育に関する研究」pp.99-162.
- 一谷 彊・相田貞夫・水谷 昭（1989）長期欠席生徒の問題理解と援助・指導 京都教育大学教育実践研究年報、第5号 pp.323-345
- 一谷 彊・相田貞夫・水谷 昭（1989）中学生の学校生活への充実感に関する教育心理学的研究（1）——学校生活への意識・行動と満足感——京都教育大学教育実践研究年報 第6号（印刷中）
- 岩原信九郎（1962）増補版・推計学による新教育統計法（第33版）日本文化科学社
- 河合隼雄（編著）（1985）生徒指導とカウンセリング ミネルヴァ書房
- 倉智佐一（編著）（1978）児童理解の方法 ミネルヴァ書房
- 京都府総合教育センター（1982）教育資料・昭和56年度第4号「学校教育相談Ⅰ」
- 京都府総合教育センター（1984）教育資料・昭和59年度第1号「子どもの生活意識と行動に関する研究調査」
- 舞鶴市立和田中学校（1980）中学校における同和教育 部落問題研究所
- 舞鶴市立和田中学校（1985）「集団意識をそだてる」～和田中ギネスのとりくみ～『くらしと結ぶ同和教育』13集 同和教育研究会京都府連合会
- 文部省（1986）生徒指導の手引（改定版）

文部省（1983）「生徒の健全育成をめぐる諸問題」——登校拒否問題を中心に—— 生徒指導資料・第18集、
生徒指導研究資料・第12集

坂本昇一（編著）（1981）生徒指導「現代のエスプリ」No. 172. 至文堂

米川英樹（1983）中学生の人間形成「現代のエスプリ」No. 196, pp. 15-26, 至文堂

(資料 1) 「和田中ギネスのとりくみ」の参考資料

和田中学校生徒会の財庫

「和田中学校生徒会ギネスブック」

- 1) 目的 自分達の持っている創造性や意欲を引き出し、生活の中に主体性と団結の喜びや力を確かめる。
- 2) 認定基準 「みんなが力を合わせ豊かな学校生活をつくりだす」ときに積極的な意欲が認められる全員参加の取り組みを認定しみんなの財庫(宝)とする。
- 3) 全員参加の活動集団 学級・クラブ・専門委員会
- 4) 認定の方法 ①基幹集団の代表者は取り組みの予告を生徒会本部にする ※ 予告用紙あり
②認定は全校の仲間に取り組みの成果を発表した後生徒協議会と先生で行う。
- 5) 認定証の発行と掲示 認定証は基幹集団に対して発行すると共に職員室前の廊下にその写しを掲示していく。

※ 取り組んだ成果や感想は積極的によくの仲間に紹介しよう。

(予告用紙) [例]

生徒会本部へ 昭和59年 月 日
放送のクラスは 月 日より1週間
全員参加なしの取り組みに挑戦いたします。
年 組 代表

プリント
全校集会で発表
など工夫しよう

〔和田中ギネス挑戦の歩み〕

1 全 員 名 札	1-2	5/22~ 5/29	×
2 全員掃除をさぼらない	1-2	5/22~ 5/29	○
3 全員遅刻なし	1-2	5/22~ 5/29	○
4 全 員 名 札	3-1	5/28~ 6/ 2	×
5 全 員 名 札	3-4	5/28~ 6/ 2	×
6 全 員 参 当	3-3	5/28~ 6/ 2	×
7 全員なわとび	2-2	5/28~ 6/ 4	○ 21回
8 全 員 参 当	1-1	5/28~ 6/ 4	○
9 風船の遠投	2-4	5/28~ 6/ 9	×
10 全 員 参 当	1-3	6/ 1~ 6/30	○
11 全員生活ノート	階級	5/28~ 6/30	×
12 研、全員運動せず学校し 本屋の下、階級の掃除をする	階級	5/28~12/24	○
45 全員なわとび	1-2	10/23~10/30	×
46 廊下の中で毎日1人1発言	1-4	10/30~11/12	×
47 全 員 名 札	1-2	10/31~11/13	○
48 全員青葉山山頂に立つ	3-1	11/ 1	○
49 全員青葉山山頂に立つ	3-2	11/ 1	○
50 全員青葉山山頂に立つ	3-3	11/ 1	○
51 全員青葉山山頂に立つ	3-4	11/ 1	○
52 全員青葉山8合目まで登る	階級	11/ 1	○
53 廊下の中で毎日1人1発言	1-4	12/ 3~12/ 6	○
54 円陣バス100回	1-3	12/21	×

和田中生徒会
ギネスブック

認定証

第3号

2年2組

あなたたちのクラスは、

全員なわとび
21回

を達成したことを認定し

みんなを賞賛の心をおくります。

和田中学校生徒会
和田中学校



(資料 2) 「調査1」(7月時点)の質問項目と内容

学校生活についての調査 1

和田中学校・調査研究部

ね ら い

この学校生活についての調査は、生徒のみなさんと協力して、よりよい豊かな学校をつくるための資料とします。

名前はいりません。学年と組、男女の別だけ、答えの用紙に書いてください。ですから、声をだしたり、横の人と話したり相談したりせずに、まじめに、自分の思ったとおり答えてください。

⑩答えを書くときの注意

答えはすべて、べつの 答えの用紙 に記号と一部言葉で書いてください

問1 あなたは、学校が楽しいですか。

ア、とても楽しい イ、楽しい ウ、あまり楽しくない エ、全然楽しくない

問2 あなたは、今、学校の勉強がわかりますか。

ア、よくわかる イ、だいたいわかる ウ、あまり わからない エ、ほとんど わからない

問3 あなたは、今、友達との関係はどのようになっていますか。

ア、うまく いる イ、だいたい いる ウ、あまり いない エ、全然 いない

問4 あなたは、今、先生との関係はどのようになっていますか。

ア、うまく いる イ、だいたい いる ウ、あまり いない エ、全然 いない

問5 あなたは、自分の学級についてどう思いますか。

ア、たいへんよい イ、よい ウ、あまりよい エ、全然よい
学級である 学級である 学級でない 学級でない

問6 あなたは、入部しているクラブ活動についてどう思いますか。

A、入部していない
ア、たいへんよい イ、よい ウ、あまりよい エ、全然よい
クラブである クラブである クラブでない クラブでない

問7 あなたは、学校生活のなかで、夢中になったり、打ち込んで取り組むこと(勉強、クラブ活動、生徒会・学級の仕事、行事・自主活動、など)がありますか。

ア、いつもある イ、ときどきある ウ、あまりない エ、全然ない

問8 問7で「ア、いつもある」「イ、ときどきある」と答えた人は、どんなことに夢中になったり、打ち込んだりしているのですか。次の中から1つえらんで下さい。

ア、授業 イ、朝のドリルなど授業以外の学習 ウ、クラブ活動
エ、生徒会・専門委員会の仕事 オ、班・学級の仕事 カ、体育祭
キ、野外活動・修学旅行 ク、ギネスなど自主活動 ケ、文化祭
コ、友達との会話 サ、先生との会話 シ、その他

問9 あなたは、学校以外に、夢中になったり、打ち込んで取り組むこと(家族との対話、学外の文化・スポーツクラブ、塾の勉強、おけいごと、自分の趣味、学校外の人との対話、その他の遊び、など)がありますか。

ア、いつもある イ、ときどきある ウ、あまりない エ、全然ない

問10 自分の班や学級の仲間が、学校の中でやっていることは、だいたい知っていますか。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらともいえない

問11 自分の班や学級の仲間が、今、どんなことを考えているか知りたいと思いますか。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらでもない

問12 あなたは、学校の中に、気楽に話せる友達がいいますか。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらともいえない

問13 自分の班や学級からはみだす仲間が出てくることは、学級全体の問題だと思いますか。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらともいえない

問14 自分の班や学級の仲間が、よくないことをしていたら注意したいと思いますか。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらともいえない

問15 自分がよくないことをしていたら注意してくれる友達がいいますか。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらともいえない

問16 機会があれば、自分の班や学級のために、役立つことをしたいと思いますか。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらともいえない

問17 自分の班や学級がうまくいっていない時は、話し合って解決したいと思う。

ア、はい イ、いいえ ウ、どちらともいえない

問18 あなたは、生徒会の役員や学年委員をどのように選びましたか。

ア、とても しっかり 選んだ イ、だいたい しっかり 選んだ ウ、すこし しっかり 選んだ エ、まったく しっかり 選んだ
選んだ 選んだ 選んだ 選んだ

問19 あなたは、今の生徒会の役員や学年委員の人達はみんなの代表としての役割をはたしていると思いますか。

ア、とてもよく はたしている イ、だいたい はたしている ウ、あまり はたしていない エ、全然 はたしていない

問20 あなたは、生徒会の活動が活発になることと、学校がよい方向に進んでいくことは関係があるとおもいますか。

ア、とても 関係がある イ、関係がある ウ、あまり 関係がない エ、全然 関係がない

問21 あなたは、今の生徒会の活動が、生徒の願いや要求にもとづいてとりくまれていると思いますか。

ア、そのとおりだ いる イ、だいたい そう なる ウ、あまり そう なる エ、全然 そう なる
なっている なっていない なっていない

問22 あなたは、生徒会(本部・専門委員)、学年委員会や学級のとりくみで、クラブや他のことができなくて「いやだなあ」と思ったことがありますか。

ア、いつも そう イ、時々 そう ウ、あまり そう エ、全然 そう
思う 思う 思わない 思わない

- 問23 あなたは、生徒会や学年委員の行事やとりくみに自分なりに協力していますか。
 ア、たいへん協力している イ、だいたい協力している ウ、あまり協力していない エ、全然協力していない
- 問24 あなたは、学校での行事的な活動（たとえば、野外活動、修学旅行など）に参加した時、活動の目標・めあてを理解して参加しましたか。
 ア、じゅうぶん理解していた イ、だいたい理解していた ウ、あまり理解していなかった エ、全然理解していなかった
- 問25 あなたは、学校での行事的な活動のとき、規則・きまりが厳しすぎると感じますか。
 ア、いつもそう思う イ、時々そう思う ウ、あまりそうは思わない エ、全然そうは思わない
- 問26 あなたは、学校での行事的な活動のとき、ほとんどの人が何かの役割をもってとりにくんでいると思いますか。
 ア、いつもそう イ、だいたいそう ウ、あまりそう エ、全然そう なっている なっている なっていない なっていない
- 問27 和田中ギネスに挑戦できる集団は、学年、学級、クラブ、生徒会本部、学年委員専門委員会などで、夏休みなどには個人の部があることを知っていましたか。
 ア、はい イ、いいえ
- 問28 和田中ギネスの目的は「自分達のもっている創造性や意欲を引き出し、生活の中に主体性と団結の喜びや力を確かめ合う。」となっていますが、正確にはしらくなくとも、だいたいの考え方は知っていましたか。
 ア、はい イ、いいえ
- 問29 ギネスのとりくみは、学校生活をよりよくしていくことに役立っていると思いますか。
 ア、とても役立っている イ、役立っている ウ、あまり役立っていない エ、全然役立っていない
- 問30 ギネスに挑戦することによって、学校のなかで自分の生活にめあてができたと思いますか。
 ア、とても思う イ、思う ウ、あまり思わない エ、全然思わない
- 問31 ギネスに挑戦しているとき、いまだに見せなかった学校の仲間の良いところを見つけるといことがありましたか。
 ア、はい イ、いいえ ウ、わからない
- 問32 ギネスに挑戦することによって、学級の仲間の協力が高まりましたか。
 ア、とても高まった イ、すこし高まった ウ、あまり高まらない エ、全然高まらない
- 問33 ギネスのとりくみに成功したとき、あなたは、どんな気持ちでしたか。
 ア、とてもうれしかった イ、うれしかった ウ、あまりうれしくなかった エ、全然うれしくなかった
- 問34 今後とも、和田中ギネスのとりくみをたいせつにしたいと思いますか。
 ア、はい イ、いいえ ウ、わからない
- 問35 今まで、和田中ギネスの挑戦項目は、下のようになっています。今後とりくみたいと思うものを3つえらんで下さい。なお、下になくてあたらしくとりくみたいことがあったら、その他の記号を選んで、答えをかく用紙にとりくみの項目名を書いてください。
 ア、全員名札 イ、全員掃除 ウ、全員遅刻をしない エ、全員弁当
 オ、全員縄とび カ、授業中私語をしない キ、全員生活ノート
 ク、遅刻せず朝掃除 ケ、全員忘れ物なし コ、全員土足なし
 サ、全員鉛筆 シ、授業のあいさつ ス、全員ドリル セ、一人一発言
 ソ、全員青葉山頂にたつ タ、全員円陣パス チ、漢字100万字
 ツ、英単語100万字 テ、全員ベル着 ト、確認テスト全員合格
 ナ、その他

(資料 3) 「調査2」(12月時点)の質問項目と内容

中学生の学校生活についての調査 2

和印中学校・調査研究部

ね ら い

この学校生活についての調査は、生徒のみなさんと協力して、よりよい豊かな学校をつくるための資料とします。

名前はいりません。学年と組、男女の別だけ。答えの用紙 に書いてください。ですから、声をだしたり、横の人と話したり相談したりせずに、まじめに、自分の思ったとおり答えてください。

①答えを書くときの注意

答えはすべて、べつの 答えの用紙 に記号で書いてください

問1 あなたは、学校が楽しいですか。

ア、とても楽しい イ、楽しい ウ、あまり楽しくない エ、全然楽しくない

問2 問1で「ア、とても楽しい」「イ、楽しい」と答えた人は、そのわけを次の中から2つ選んで下さい。

ア、勉強がよくわかるから イ、仲のよい友達がいるから ウ、好きな先生がおられるから エ、よい学校だから オ、クラブ活動が楽しいから
カ、夢中になって、取り組むことがあるから キ、よい学級だから ク、ギネスなど集団的活動が楽しいから
コ、みんなから、たよりにされたり、信用されているから

問3 問1で「ウ、あまり楽しくない」「エ、全然楽しくない」と答えた人は、そのわけを次の中から2つ選んで下さい。

ア、勉強がわからないから イ、仲のよい友達がないから ウ、好きな先生がいないから
エ、学校のきまりがきびしいから オ、クラブ活動が楽しくないから
カ、なぜ、勉強するのか わからないから キ、夢中になって、取り組むことがないから
ク、学級がおもしろくないから ケ、楽しい、行事や集団的活動がないから
コ、ばかにされたり、いじめられたりするから

問4 あなたは、今、学校の勉強がわかりますか。

ア、よくわかる イ、だいたいわかる ウ、あまり わからない エ、ほとんど わからない

問5 問4で「ウ、あまり わからない」「エ、ほとんど わからない」と答えた人は、次の中からそのわけを2つ選んで下さい。

ア、勉強することが、多くて、むずかしいから イ、授業の進め方が速いから
ウ、先生の説明が、わかりにくいから エ、自分がいまいがなばっていいないから
オ、勉強のやり方がわからないから カ、今までに、習ったことが わかっていないから
キ、授業中 先生の話をしっかり聞いていないから ク、授業中 学級が、さわがしいから
ケ、もともと、自分は勉強ができないから

問6 問4で「ウ、あまり わからない」「エ、ほとんど わからない」と答えた人は、そんなとき、どうしていますか 次の中から1つ選んで下さい。

ア、学校の先生にたずねる イ、友達に教えてもらう ウ、家の人に教えてもらう
エ、自分で勉強する オ、そのままにしておく カ、じゅくの先生や家庭教師に教えてもらう
キ、その他

問7 あなたは、今、友達との関係はどのようになっていますか。

ア、うまく イ、だいたいうまく ウ、あまりうまく エ、全然うまく
いっている いっている いっていない いっていない

問8 あなたは、今、先生との関係はどのようになっていますか。

ア、うまく イ、だいたいうまく ウ、あまりうまく エ、全然うまく
いっている いっている いっていない いっていない

問9 あなたにとって 先生は どのような人であってほしいと思いますか。次の中から2つ選んで下さい。

ア、よく遊んでくれる先生 イ、いっしょうけんめい教えてくれる先生
ウ、自分をよくわかってくれる先生 エ、明るく 元気な先生 オ、生徒と一緒に動いてくれる先生
カ、きびしくしかってくれる先生 キ、何でも相談できる先生
ク、ひいきをしない先生 ケ、やさしくって あたたかい先生
コ、何をしても しまらない先生 サ、何でもよく知っている先生 シ、おもしろい先生
ス、その他

問10 あなたは、自分の学級についてどう思いますか。

ア、たいへんよい イ、よい ウ、あまりよい エ、全然よい
学級である 学級である 学級でない 学級でない

問11 問10で「ウ、あまりよい 学級でない」「エ、全然よい 学級でない」と答えた人は、そのわけを次の中から2つ選んで下さい。

ア、みんなが、勝手なことをするから イ、一部の人のみで、何でもするから
ウ、まじめでない人が多いから エ、みんなが まとまることのできる活動がないから
オ、男・女のなかがわるいから カ、先生とうまくいかないから
キ、仲のよい友達がないから ク、人のことをばかにしたり、いじめたりする人がいるから
ケ、その他

問12 あなたは、入部しているクラブ活動についてどう思いますか。

(3年生の人は、過去形で考えてください。問13を答える人も同じ)

A、入部していない
ア、たいへんよい イ、よい ウ、あまりよい エ、全然よい
クラブである クラブである クラブでない クラブでない

問13 問12で「ウ、あまりよい クラブでない」「エ、全然よいクラブでない」と答えた人は、そのわけを次の中から2つ選んで下さい。

ア、クラブにこない人が多く活動がしにくいから イ、一部の人のみで、何でもしてしまうから
ウ、勝手なことをするひとがいるから エ、上級生と下級生とが、うまくいっていないから
オ、同級生のなかでもめごとがあるから
カ、顧問の先生とうまくいっていないから キ、練習内容がしっかりしていないから
ク、練習きびしいから ケ、活動の場所や用具がたりないから
コ、クラブに關係のない人がじゃまをするから

問14 あなたは、学校生活のなかで、夢中になったり、打ち込んで取り組むこと(勉強、クラブ活動、生徒会・学級の仕事、行事・自主活動、など)がありますか。

ア、いつもある イ、ときどきある ウ、あまりない エ、全然ない

問15 問14で「ア、いつもある」「イ、ときどきある」と答えた人は、どんなことに夢中になったり、打ち込んだりしているのですか。次の中から1つえらんで下さい。

ア、授業 イ、朝のドリルなど授業以外の学習 ウ、クラブ活動
エ、生徒会・専門委員会の仕事 オ、班・学級の仕事 カ、体育祭
キ、野外活動・修学旅行 ク、ギネスなど自主活動 ケ、文化祭
コ、友達との会話 サ、先生との会話 シ、その他

問16 あなたは、学校以外に、夢中になったり、打ち込んで取り組むこと（家族との対話
学外の文化・スポーツクラブ、塾の勉強、おけいこごと、自分の趣味、学校外の人
との対話、その他の遊び、など）がありますか。

ア、いつもある イ、ときどきある ウ、あまりない エ、全然ない

問17 あなたは、生徒会の活動が活発になることと、学校がよい方向に進んでいくこと
は関係があるとおもいますか。

ア、とても イ、関係がある ウ、あまり エ、全然
関係がある 関係がない 関係がない

問18 ギネスのとりくみは、学校生活をよりよくしていくことに役立っていると思いま
すか。

ア、とても イ、役立って ウ、あまり役立って エ、全然
役立っている いる いない 役立っていない

問19 あなたは、今回の期末テストを、自分なりに評価してどう思いましたか。

ア、よくできた イ、だいたいできた ウ、あまり エ、全然
できなかった できなかった

問20 問19で「ア、よくできた」「イ、だいたいできた」と答えた人は、その原因は
いろいろあると思いますが、次の中から一番自分の考えに近いと思うものを1つ
だけ選んで下さい。

ア、テスト内容が、やさしかったから イ、できたのは、運がよかつたから
ウ、日ごろから、自分にできる力があるから エ、テストしらべをがんばって
やったから

問21 問19で「ウ、あまり できなかった」「エ、全然 できなかった」と答えた人
は、その原因が、いろいろあると思いますが、次の中から一番自分の考えに近い
と思うものを1つだけ選んで下さい。

ア、テスト内容が、むずかしかったから イ、できなかったのは 運がわる
かったから
ウ、日ごろから、自分は勉強ができないから エ、テストしらべの努力が
たりなかったから